

# 洞ノ元古墳

大野城市教育委員会



第 1 図

洞ノ元古墳は、古墳時代後期（約1400年前）に造られた、直径11mほどの円墳です。福岡地区水道企業団牛頸浄水場のすぐ東隣の丘陵上にありました。この丘陵は削られて、そのあとに洞ノ元古墳公園ができました。洞ノ元古墳はその公園内に復元・保存されています。



第 2 図

第1図は、洞ノ元古墳を真上から撮った写真です。円形の盛土（墳丘）と、円弧を描く溝（周溝）を持っています。

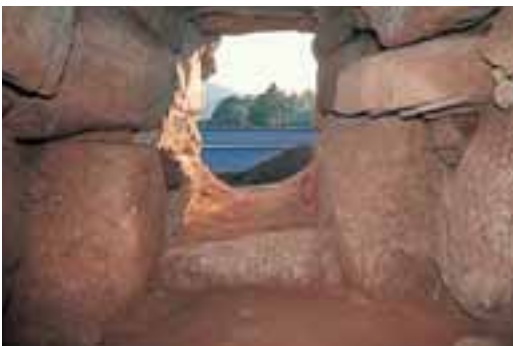
第2図は、古墳の南の平野台側から撮ったものです。周囲の家や道路より14m以上も高い場所にあったので、この古墳の上に立つと牛頸全域から春日市の方まで見渡すことができました。



第 3 図

第4図は、石室内の様子です。奥壁と左右の側壁、そして床面がうつつています。奥壁と側壁は、いちばん下の段に大きな石を据え、その上に小ぶりの石を積み上げていく方法をとっていました。石と石の間は、より小さな石や粘土などを用いてふさいでいました。床には、大人のこぶしよりも少し大きめの石を一面にしきつめていました。

第5図は、4図と同じ向きでより上の方を見たものです。奥壁と側壁、天井の一部がうつつています。上にいくにしたがって石が内側にせり出すように積み上げられているのがおわかりいただけると思います。これは、持送りと呼ばれる技法です。1400年の風雪を経てもびくともしないこのような石組みの技術に、現代の私たちはただ驚くばかりです。



第 6 図

では、胴ノ元古墳の石室を少しくわしく見てみましょう。第3図は正面から見た写真です。やや奥の方に石が横たえられていますが、ここからさらに奥のまっくらな部分が死者を葬った<sup>ほうむ</sup>玄室です。それより手前の、左右に石を積み上げた部分が、玄室への通路すなわち<sup>せんどう</sup>羨道です。いちばん上の大きな石は天井石といい、文字通り石室の天井となっています。



第 4 図



第 5 図

最後の第6図は、石室の中から見た外の様子です。床に横になっている石を<sup>かまちいし</sup>框石、その両側に立っている石を<sup>そでいし</sup>袖石といいます。現在では家が建て込んでしまいましたが、この古墳が造られた当時は、牛頸の山々に須恵器を焼く煙が立ちのぼっているのが見えたことでしょう。そして、この古墳に葬られた人物は須恵器づくりに関係していた人でしょう。